

3.3 [土]

第8回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール/15時開演
Parthenon Popular Series, No. 8
Saturday, 3rd March, 15:00 / Parthenon Tama in Tama-center

指揮/小林研一郎 (特別客演指揮者)

Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI P.6

コンサートマスター/小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

チャイコフスキー 弦楽セレナード ハ長調 作品48 [約28分] P.10

TCHAIKOVSKY / Serenade for Strings in C major, op. 48

- I. Pezzo in forma di Sonatina
- II. Walzer
- III. Elégie
- IV. Finale (Tema Russo)

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー 交響曲 第5番 ホ短調 作品64 [約50分] P.11

TCHAIKOVSKY / Symphony No. 5 in E minor, op. 64

- I. Andante - Allegro con anima
- II. Andante cantabile, con alcuna licenza
- III. Valse : Allegro moderato
- IV. Finale : Andante maestoso - Allegro vivace

[主催] 多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社
[助成] 平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業



3.10 [土]

第205回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演
Saturday Matinée Series, No. 205
Saturday, 10th March, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

3.11 [日]

第205回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演
Sunday Matinée Series, No. 205
Sunday, 11th March, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮/謙=デイヴィッド・マズア Conductor KEN-DAVID MASUR P.7

ヴァイオリン/アラベラ・美歩・シュタインバッハー
Violin ARABELLA STEINBACHER P.9

コンサートマスター/小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ウェーバー 歌劇〈オイリアンテ〉序曲 [約8分] P.12
WEBER / "Euryanthe" Overture

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] P.13
MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64

- I. Allegro molto appassionato - II. Andante -
- III. Allegretto non troppo - Allegro molto vivace

[休憩 Intermission]

シューマン 交響曲 第3番 変ホ長調 作品97 〈ライン〉 [約32分] P.14
SCHUMANN / Symphony No. 3 in E flat major, op. 97 "Rheinische"

- I. Lebhaft
- II. Scherzo. Sehr mässig
- III. Nicht schnell
- IV. Feierlich
- V. Lebhaft

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
[事業提携] 東京芸術劇場



3.16 [金]

第576回 定期演奏会
サントリーホール/19時開演
Subscription Concert, No. 576
Friday, 16th March, 19:00 / Suntory Hall

指揮/ヘンリク・ナナシ Conductor HENRIK NÁNÁSI P.8

ヴァイオリン/ルノー・カプソン Violin RENAUD CAPUÇON P.9

特別客演コンサートマスター/日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

モーツァルト(ブゾーニ編) 歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲 [約9分] P.15
MOZART (arr. BUSONI) / "Don Giovanni" Overture

ブゾーニ ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35a [約25分] P.16
BUSONI / Violin Concerto in D major, op. 35a
I. Allegro moderato - II. Quasi andante - III. Allegro impetuoso

[休憩 Intermission]

R. シュトラウス 交響詩〈ツァラトウストラはかく語りき〉
作品30 [約33分] P.17

R. STRAUSS / Also sprach Zarathustra, op. 30
I. 序奏 - II. 世界の背後を説く者について - III. 大いなる憧れについて -
IV. 歓喜と情熱について - V. 埋葬の歌 - VI. 科学について -
VII. 病から回復に向かう者 - VIII. 舞踏の歌 - IX. さすらい人の夜の歌

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
[協力] アフラック



※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

3.20 [火]

第610回 名曲シリーズ
サントリーホール/19時開演
Popular Series, No. 610
Tuesday, 20th March, 19:00 / Suntory Hall

3.21 [水・祝]

第102回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール/14時開演
Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 102
Wednesday, 21st March, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮/小林研一郎(特別客演指揮者)
Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI P.6

特別客演コンサートマスター/日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ロッシーニ 歌劇〈セビリアの理髪師〉序曲 [約8分] P.19
ROSSINI / "The Barber of Seville" Overture

ビゼー 〈アルルの女〉第2組曲 [約18分] P.20
BIZET / L'Arlésienne Suite No. 2
I. パストラール
II. 間奏曲
III. メヌエット
IV. ファランドール

[休憩 Intermission]

ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14 [約55分] P.21
BERLIOZ / Symphonie fantastique, op. 14

I. 夢と情熱
II. 舞踏会
III. 野の情景
IV. 断頭台への行進
V. ワルプルギスの夜の夢

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社(3/20)
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
[協力] 横浜みなとみらいホール(3/21)



小林研一郎

(特別客演指揮者)

Ken-ichiro Kobayashi

円熟のタクトに注目
名作交響曲2選



©読響

読響が世界に誇る特別客演指揮者が、得意とするチャイコフスキーの交響曲第5番とベルリオーズの代表作〈幻想交響曲〉を振る。円熟のタクトが生み出す情熱のサウンドにじっくり耳を傾けたい。

1940年、福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。1974年、第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任。2002年5月の「プラハの春音楽祭」オープニングコンサートの指揮者に、東洋人として初めて起用されたほか、ハンガリー政府より民間人最高位の“星付中十字勲章”を授与された。11年、文化庁長官表彰受賞。13年、旭日中綬章を受章。

現在、ハンガリー国立フィル、日本フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、九州響の首席客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院(ハンガリー)名誉教授。12年7月から、東京文化会館の音楽監督も務めている。

録音の分野においては、14年4月から読響とブラームスの交響曲全集に取り組み、17年6月に「交響曲第4番/シューマン交響曲第4番」が発売され完結。いずれも絶賛を博している。

- ◇ 3月3日 バルテノン名曲シリーズ
- ◇ 3月20日 名曲シリーズ
- ◇ 3月21日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

謙=デイヴィッド・マズア

Ken-David Masur

期待の新鋭が送る
ロマン派の名曲



©Beth Ross-Buckley

ドイツの巨匠の血を受け継ぐ期待の新鋭が、ロマン派の名曲、シューマンの〈ライン〉とメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲でみずみずしい感性を披露する。

読響の元名誉指揮者で2015年に亡くなったクルト・マズアを父に

1977年、ドイツ・ライプツィヒに生まれた。6歳からピアノを学び、ライプツィヒ音楽院を経て、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学で名バリトンのトーマス・クヴァストホフに師事した。その後、米国へ移り、99年にニューヨーク・コロンビア大学のパツァ協会管弦楽団・合唱団の音楽監督に就任。J. S. バッハ、C. P. E. バッハ、W. F. バッハの交響曲やカンタータを録音し、指揮者としてのキャリアをスタートさせた。

2004~06年にフランス国立管の副指揮者を務めたほか、ミュンヘン響首席客演指揮者などを歴任。14年からボストン響のアシスタント・コンダクターを務め、17年にア

ソシエイト・コンダクターとなった。タンゲルウッド音楽祭などで活躍するほか、米サンディエゴ響とも共演している。今までにドレスデン・フィル、イスラエル・フィル、トゥールーズ国立管などに客演し、日本では日本フィルと広島響を指揮している。

また、ピアニストの妻と共に、ニューヨークで毎年夏に開かれているチェルシー音楽祭の芸術監督を務めており、その手腕は地元のニューヨーク・タイムズ紙から高く評価された。

読響との共演は今回が2度目となる。

- ◇ 3月10日 土曜マチネーシリーズ
- ◇ 3月11日 日曜マチネーシリーズ

ヘンリク・ナナシ

Henrik Nánási

ハンガリーの俊英
読響に初登場

欧米の一流歌劇場で人気急上昇中のハンガリーの俊英が、読響に初登場。得意とするR. シュトラウス作品で真価を問う。名手ルノー・カプソンと共演するブゾーニのヴァイオリン協奏曲にも注目だ。



©Gunnar Geller

1975年、ハンガリー生まれ。ブダペストのバルトーク音楽院でピアノと作曲を学んだ後、ウィーンで指揮を修めた。英国ロイヤル・オペラハウスでパッパーノのアシスタントを務めるかわら、ピアニストや歌曲伴奏で活躍。2009年にフランクフルト歌劇場で〈ラ・ボエーム〉、10年にドレスデン国立歌劇場(ゼンパーオーパー)で〈アルジェのイタリア女〉を振ったのが評判となり、指揮者として本格デビューを果たした。

12年にベルリン・コーミッシェ・オーパーの音楽総監督に就任。〈エフゲニー・オネーギン〉〈魔笛〉〈ドン・ジョヴァ

ンニ〉〈青ひげ公の城〉など多くの新演出作品を指揮して評価をさらに高め、コーミッシェ・オーパーは15年の国際オペラ・アワードの「年間最優秀オペラ・カンパニー賞」を受賞した。ロイヤル・オペラハウス、バイエルン国立歌劇場、ハンブルク州立歌劇場、ローマ歌劇場、シカゴ・リリックオペラ、サンフランシスコ・オペラなどに客演したほか、コンサートではウィーン放送響、フィレンツェ五月祭管、ヴェネツィア・フェニーチェ劇場管などを指揮している。

◇3月16日 定期演奏会

今月のアーティスト

A

rtist of the month



©Peter Rigaud

ヴァイオリン アラベラ・美歩・シュタインバッハー

Violin Arabella Steinbacher

ドイツ・ミュンヘン生まれ。ミュンヘン音楽大学で名教師チユマチェンコに師事し、ギトリスからも教えを受けた。これまでにオーケストラではバイエルン放送響、ロンドン響、パリ管、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、ボストン響など、指揮者ではマリナー、メータ、シャイー、プロムシュテット、ゲルギエフ、ルイーダ、ネルソンスらと共演している。録音はペンタトーン・クラシックスから多数出ている。使用楽器は、日本音楽財団貸与のストラディヴァリウス「ブース」(1716年製)。

読響との共演は、今回が2度目となる。

◇3月10日 土曜マチネーシリーズ

◇3月11日 日曜マチネーシリーズ



©Mat Hennek

ヴァイオリン ルノー・カプソン

Violin Renaud Capuçon

現代フランスを代表する名手。1976年生まれ。パリ国立高等音楽院でジェラルド・プーレに学び、ベルリンではアイザック・スターンらに師事した。2000年代初めからソリストとして活躍し、オーケストラではベルリン・フィル、ボストン響、パリ管、ロンドン響など、指揮者ではハイティンク、ドホナーニ、パーヴォ・ヤルヴィ、チョン・ミョンフンらと共演している。室内楽にも積極的で、アルゲリッチ、バレンボイム、プレトニョフらと共演し、録音もエラート/ワーナー・クラシックスから多数出ている。

読響とは2度目の共演となる。

◇3月16日 定期演奏会

3.3 [土]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

チャイコフスキー
弦楽セレナード ハ長調 作品48

作曲：1880年9月21日～10月26日／初演：1881年10月30日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約28分

ピョートル・チャイコフスキー(1840～93)は、サンクトペテルブルクの音楽学校を卒業後、モスクワに創設された音楽学校で教えながら創作活動を続けていた。経済的に不安定な彼を支援したのは、鉄道王の未亡人メック夫人であった。1877年にチャイコフスキーが離婚した後、ヨーロッパを旅した彼を支えたのも、メック夫人であったといわれている。その旅先で、彼はさまざまな文化や音楽に接し、みずからの創作に取り入れた。〈弦楽セレナード〉作品48は、その時期の創作である。

チャイコフスキーは、モーツァルトをこよなく愛していたことで知られる。彼は古典派の様式を範としつつ、ワルツやエレジーなどを取り入れてロマン派ならではのセレナードに仕上げている。

第1楽章 ソナチネ形式の楽章 ハ長

調。序奏ののち、滑らかに揺れ動く第1主題が続く。第2主題はト長調で、スタカートに彩られた軽やかな楽想。

第2楽章 ワルツ ト長調。ワルツを得意とするチャイコフスキーらしい音楽。第1ヴァイオリンが主たるメロディを優雅に奏でてゆく。

第3楽章 エレジー ニ長調。エレジーとは哀歌を意味するが、この楽章は長調で書かれている。ほのかな翳りの漂う序奏部に続き、主部では息の長いメロディラインとともに、弾むような響きがちりばめられている。

第4楽章 フィナーレ ト長調～ハ長調。民謡風のメロディと古典派を思わせる優雅な楽想が融合し、気品あふれる音楽が生み出されている。コーダでは第1楽章の序奏が回帰。その後、音楽は堂々と結ばれる。

楽器編成／弦五部

チャイコフスキー
交響曲 第5番 ホ短調 作品64

作曲：1888年5月～8月26日／初演：1888年11月17日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約50分

1866年、チャイコフスキーは第1番の交響曲を書き上げ、結婚する77年までに第4番までを完成させた。その後、彼は1885年に〈マンフレッド交響曲〉を作曲するまで、交響曲の創作を手掛けていない。

チャイコフスキーは1886年、ヨーロッパへの演奏ツアーを行い、旅先でグリーグやドヴォルザークらと出会った。この旅行が交響曲第5番の創作の背景にあるとみられている。

交響曲第5番で象徴的なのは、第1楽章の序奏で示される「運命の動機」である。この作品は循環主題の発想で書かれており、すべての楽章に現れる「運命の動機」は、音楽に統一感をもたらすと同時に、フィナーレの終盤ではドラマティックなクライマックスを形成する。

サンクトペテルブルクで初演された交響曲第5番の評価は、芳しいものではなかった。しかし、この曲のハンブルク初演を聴いたブラームスは、チャイコフスキーの弟モデストに宛てた手紙のなかでこの作品を高く評価し、理解を示したという。

第1楽章 アンダンテ、ホ短調～アレグロ・コン・アニマ。序奏でクラリネットが

奏でる「運命の動機」は、すべての楽章に登場する。休符をはさみ、主部に入るとクラリネットとファゴットが弱音で第1主題を示す。序奏をともなったソナタ形式で書かれており、ヴァイオリンの奏でる第2主題は甘美な趣を湛えている。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ、ニ長調。3部形式に基づいており、弦楽器の緩やかな歩みに導かれて、ホルンによる優美な主題が現れる。中間部では嬰ハ短調に変わる。

第3楽章 ワルツ アレグロ・モデラート、イ長調。ワルツのリズムに乗って、第1ヴァイオリンは艶やかな音色で主旋律を歌い上げてゆく。

第4楽章 フィナーレ アンダンテ・マエストーソ、ホ長調～アレグロ・ヴィヴァーチェ、ホ短調。厳かなながらも解放感の漂う序奏から一変して、主部では冒頭からエネルギーに第1主題が鳴り響く。第1楽章と同じく、この楽章も序奏をとまなうソナタ形式で、木管楽器が第2主題を愛らしく奏でる。コーダに入ると、さまざまな楽器が「運命の動機」を力強く鳴り響かせる。

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

3.10 [土]

3.11 [日]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

ウェーバー

歌劇〈オイリアンテ〉序曲

作曲：1823年／初演：1823年10月25日、ウィーン／演奏時間：約8分

ドイツ・ロマン派の先駆者カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）の〈オイリアンテ〉は、「ドイツ国民歌劇の創始者」の名を決定づけた〈魔弾の射手〉（1821年初演）に続く、全3幕の大作オペラ。ウィーンのケルントナーア劇場での上演用に依頼され、本編は1821年12月15日から1823年8月29日、序曲は1823年9月1日から10月19日にかけて作曲された。台本は、中世フランスのロマンスに基づき、文筆家ヘルミーナ・フォン・シェジーの手による。妻オイリアンテと離れて戦場にいるアドラール伯爵が、リジアルト伯爵の陰謀によって妻の貞操を疑い、殺そうとまでするも、最後は誤解が解けるといった物語である。ただし本編は、作曲者の指揮による初演後、台本の不出来ゆえにあまり上演されず、序曲のみがレパートリーに定着した。なおシェジーは、直後に

シューベルトの付随音楽で知られる戯曲〈ロザムンデ〉を書いたが、こちらにも失敗に終わっている。

序曲は、勇壮かつ格調高い傑作。大きく分けて三部から成っている。アレグロ・マルカート・コン・モルト・フォーコ、変ホ長調で勢いよく始まり、管楽器が行進曲風の第1主題を奏する。この冒頭部分の3連音と付点リズムが曲全体を支配する。第2主題は、ティンパニの導入に続いてヴァイオリンが奏する流麗な旋律。両主題は本編のアドラールの歌に拠っている。やがて弱音器を付けた8本のヴァイオリンにヴァイオラが加わるラルゴの部分に移り、亡霊の場面の音楽が精妙に奏される。低弦に始まりフーガ風に進むアッサイ・モデラートの短調部分が盛り上がったところで冒頭の音楽が回帰。二つの主題が力強く展開され、輝かしい終結を迎える。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

作曲：1838～1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分

ドイツ初期ロマン派を代表する作曲家フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）が、短い生涯の円熟期に完成した代表作。ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーの諸作と並ぶ人気ヴァイオリン協奏曲である。

哀愁を帯びた冒頭の主題で知られ、流れるように運ばれるこの曲、実は完成までに6年を要した。1838年メンデルスゾーンは、自身が常任指揮者を務めるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターで友人のフェルディナント・ダーヴィトのために構想を開始した。しかし、冒頭部分の扱いに苦慮するなど創作は難航。ダーヴィトの助言を仰ぎながら、1844年ようやく完成し、翌年3月、ゲヴァントハウスの演奏会で、ダーヴィトの独奏、病氣療養中のメンデルスゾーンに代わるニルス・ゲーゼの指揮により初演された。

主な特徴は、やや意外なホ短調という調性（前記3人の作品はヴァイオリンがよく響くニ長調）、そして全3楽章が切れ目なく演奏される点と、それまで第1楽章の最後に置かれ、内容も奏者

任せだったカデンツァが、中間部に移された上、すべて楽譜に記された点にある。雰囲気の流れと一貫した曲調を企図したこれらの発想は、当時のヴァイオリン協奏曲としては革新的だった。

曲は、古典的な均整美と甘美なロマンティズムが溶け合った名品。優美であると同時に男性的な力強さを秘めており、何より旋律の美しさは比類がない。また独奏はほとんど休みなく弾き続け、名人芸的な技巧を随所で披露する。

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッショナート。管弦楽による主題提示部がなく、独奏が2小節目から登場する点も意外性充分。そこで弾かれる第1主題と、木管に出される穏やかな第2主題を中心に淀みなく展開され、ファゴットの持続音で第2楽章へ移る。

第2楽章 アンダンテ。叙情的な歌が流れゆくハ長調の緩徐楽章。中間部は短調に変わり、荘重な趣が漂う。

第3楽章 アレグレット・ノン・トロppo～アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。短い経過部から二つの主題が軸を成すホ長調の主部へ移り、華やかな音楽がテンポよく繰り広げられる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

シューマン 交響曲 第3番 変ホ長調 作品97 〈ライン〉

作曲：1850年／初演：1851年2月6日、デュッセルドルフ／演奏時間：約32分

ドイツ・ロマン派の牽引者ロベルト・シューマン（1810～56）が、晩年に近い40歳の時に完成した、実質的な最後の交響曲（第4番は以前の作の改訂）。1850年9月、彼はデュッセルドルフ市の音楽監督に就任し、ドレスデンから当地へ移った。そして10～11月にチェロ協奏曲を作曲し、本作を11月2日から12月9日までの短期間で一気に完成。翌年2月、作曲家自身の指揮により初演された。

本作は、ドイツ西部のライン川沿岸地域に移住したシューマンが、当地の風物に触発されて書いた交響曲である。具体的な標題はないものの、ライン地方の明るく牧歌的な雰囲気や生活を描いた音楽であるのは、初演当時から衆目の一致するところ。さらには、ケルンの大聖堂の荘厳な美しさと、そこで見た大司教の枢機卿就任式典にも靈感を得たとされ、第4楽章（当初「厳かな式典の伴奏の趣で」と記されていた）はその直接的な反映とみられている。なお〈ライン〉の名は没後に与えられた。

曲は、古典的形式を崩した5楽章構成が大きな特徴。中でも二つめの緩徐楽章的な第4楽章が変則性をもたらし

ている。またシューマンの交響曲では唯一、第1楽章の序奏がなく、変ホ長調の3拍子で冒頭から主題が提示される点とその音型は、ベートーヴェンの〈英雄〉交響曲を彷彿させもする。全体的には、シューマン特有の厚い響きとロマンティックな香りを有する円熟の名作である。

第1楽章 生き生きと。大河の流れのような第1主題と、木管が奏する悲しげな第2主題を中心に運ばれる、スケールの大きな音楽。

第2楽章 スケルツォ、きわめて穏やかに。素朴な民俗舞曲風の主部に、感傷的な中間部が挟まれる。

第3楽章 速くなく。付点リズムで上下する柔らかな主要主題に、軽やかな音型や優美な副主題が交わる間奏曲風の楽章。

第4楽章 荘重に。この楽章から加わったトロンボーンがホルンと共に奏でるコラル風主題に基づく厳かな音楽。中間部はフーガ風に展開される。

第5楽章 生き生きと。一転して明朗な主題が軸となり、ファンファーレを交えながら華やかに進行。民俗的な祝祭感の中で終結する。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

3.16 [金]

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

モーツァルト（ブゾーニ編） 歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲

作曲：1787年（モーツァルト）、1908年（ブゾーニ編曲）／
初演：1787年10月29日、プラハ（モーツァルト）、1909年1月2日、ベルリン（ブゾーニ編）／演奏時間：約9分

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）の歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉（全2幕）は、ロレンツォ・ダ・ポンテのイタリア語の台本に作曲され、1787年にプラハで初演された。幕開けで演奏される序曲は、オペラでは騎士長の石像が登場する場面、第2幕の大詰めの緊張感に満ちた音楽で始まる。力強い和音と付点のリズムで不安が高まるアンダンテ（二短調）、それに軽快で明るいモルト・アレグロ（二長調）が続いて、鮮烈な暗と明のコントラストを作り出す。

モーツァルト屈指の歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉は、序曲のみでも演奏されるが、オペラでは最後に転調し、静かに終結してそのまま第1幕に入るため、演奏会では二長調の和音を強調した終結部が付された版が用いられる。今回ナナシは、一般的なモーツァルト自作の終結部で結ばれる版ではなく、フェルッチョ・ブゾーニ（1866～1924）の

編曲版を取り上げる。ブゾーニは、19世紀最後のヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして、また作曲家、理論家、教育者として活躍した。創作以外にも、バッハから同時代のシェーンベルクまで様々な作曲家の作品の編曲や協奏曲のカデンツァなどを多数手がけ、それらに彼独自の作品解釈や音楽的発想を投影させた。

ブゾーニ編の序曲は、彼が1902年から1909年までベルリンで企画した、現代音楽を紹介する演奏会シリーズの最終回（第12回）で初演された。通常の編成に3本のトロンボーンを加え、オペラからも新たな旋律を採り入れた。ジョヴァンニが地獄へ引きずり込まれた後、残された登場人物が各自の思いを歌うフィナーレの六重唱の旋律も現れる。19世紀の上演習慣で削除されることもあった、この軽快な音楽を入れてこそモーツァルトであるという彼の解釈がこの編曲で示された。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ブゾーニ ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35a

作曲：1896年～1897年／初演：1897年10月8日、ベルリン／演奏時間：約25分

イタリア生まれのドイツの作曲家フェルッチョ・ブゾーニは、7歳でピアニスト・デビュー、10歳で自作をウィーンの舞台上で指揮した早熟の天才だった。ヴィルトゥオーゾ・ピアニストとしてあらゆる称賛と栄光につつまれ、1894年からはベルリンに定住した。以来、創作活動を本格化させ、またバッハの鍵盤作品の研究(彼の校訂によるバッハ=ブゾーニ版は、濃厚な表情づけや強弱の指示など、彼の自由な解釈で原曲が大きく歪められたため、後に様々な批判を受けた)など、精力的に活動を続けた。

ヴァイオリン協奏曲は、ブゾーニの親友でライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターを長年務めたヘンリ・ペトリ(1856～1914)のために作曲された。ペトリはブラームスの友人ヨアヒムの高弟で、20世紀前半の名ピアニスト、エゴン・ペトリの父親である。ベートーヴェンやブラームスのヴァイオリン協奏曲と同じニ長調が意識的に選ばれ、単一楽章だが、協奏曲の伝統的な楽章構成の要素を含み、ピアノのヴィルトゥオジティ

(名人芸)をヴァイオリンに移し換えたような高度な技巧が披露される。

オーケストラの序奏(アレグロ・モデラート、ニ長調)に続いて、ヴァイオリン独奏が魅力的な旋律を奏でる。素早いパッセージや連続するトリルがテンポを変化させながら高まった後、静かな部分(クワジ・アンダンテ、ハ長調)になり、ヴァイオリン独奏が甘い旋律を歌い、木管楽器と絡み、最後はゆっくりと、夢見のような表情で最高音へと向かう。ブゾーニが「カーニバル風」とした快活な部分(アレグロ・インペトゥオーソ、ニ長調)は、ヴァイオリン独奏が目まぐるしく動き回り、2拍子の行進曲を経て、最後はさらに速度を上げて華やかに結ばれる。

初演は、ペトリのヴァイオリン独奏とブゾーニ指揮のベルリン・フィルで行われ、5回のカーテンコールに応じてフィナーレが再度演奏されたと伝えられている。しかしその後は、往年の巨匠ヨーゼフ・シゲティやアドルフ・ブッシュが愛奏したものの、レパートリーに定着することはなかった。近年、再評価され、新たな光が当てられている。

楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル、大太鼓)、弦五部、独奏ヴァイオリン

R.シュトラウス 交響詩〈ツァラトウストラはかく語りき〉 作品30

作曲：1894～1896年／初演：1896年11月27日、フランクフルト・アム・マイン／演奏時間：約33分

リヒャルト・シュトラウス(1864～1949)は、リストが創始した交響詩というジャンルを継承して発展させ、数々の傑作を残した。オーケストラの標題音楽の一種である交響詩は、物語や伝説、情景、詩などから着想を得て書かれた、概ね単一楽章の楽曲である。シュトラウスは、1880年代後半から1890年代にかけて、〈ドン・ファン〉(1887～88)、〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉(1895)、〈ツァラトウストラはかく語りき〉、〈英雄の生涯〉(1898)など、彼の代表作となる交響詩を集中的に手がけた。そこでは標題のみに寄りかかるのではなく、器楽曲としての自律も目指し、〈ドン・ファン〉ではソナタ形式、〈ティル〉ではロンド形式とソナタ形式の融合、〈ドン・キホーテ〉(1897)では変奏曲形式の構造を音楽の中に取り入れ、交響詩の新たな可能性を拓いた。

1896年に完成した交響詩〈ツァラトウストラはかく語りき〉は、19世紀後半に活躍したドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェ(1844～1900)の、4部からなる同名の著作(1883～85年)から着想を得た。ニーチェはこのなか

で、キリスト教的な神を否定するものとして「超人」を描き出し、常に権力を求めて強大になろうとするツァラトウストラの力によって、「万物は行き、万物は帰って来る」、すなわち万物は生命を得て、永劫回帰するという独自の思想を打ち立てた。ニーチェのこの思想は、当時から音楽家にも多くの影響を与えた。本日の前半で演奏されたブゾーニもそのひとりで、著作『新しい音楽美学の構想』(1907)では、ニーチェ独特のアフォリズムのスタイルに影響を受けた文体で、未来の音楽への展望を語った。

シュトラウスも、かつて1年間だけがミュンヘン大学に在籍して哲学と美学を学び、ニーチェの思想に深く傾倒していった。ただし、シュトラウスは、「この作品で哲学的な音楽を書こうとしたわけでも、ニーチェの偉大な著作をそのまま音楽で描こうとしたわけでもない」と手紙に書いているように、この作品は、「ニーチェという天才を讃えるもの」として作曲され、1896年11月27日にフランクフルトで作曲者自身の指揮によって初演された。

単一楽章の楽曲で、有名な序奏に始まり、ニーチェの『ツァラトウストラ』

3.20 [火]

3.21 [水・祝]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

ロッシーニ

歌劇〈セビリアの理髪師〉序曲

作曲：1816年／初演：1816年2月20日、ローマ、テアトロ・アルジェンティーナ／演奏時間：約8分

ジョアキーノ・ロッシーニ（1792～1868）が書いたオペラ・ブッフア（喜劇的オペラ）のなかでも、もっとも広く知られる傑作が〈セビリアの理髪師〉。この軽快な序曲を筆頭に、“私は町のなんでも屋”や“今の歌声は”といった名曲がちりばめられた19世紀版ラブコメである。

曲名の〈セビリアの理髪師〉とは、このオペラの主人公フィガロを指す。美しい娘ロジーナに一目ぼれをしたアルマヴィーヴァ伯爵のために、理髪師でなんでも屋のフィガロが機転を利かせる。伯爵は貧しい学生に扮してロジーナに近づき、大騒動の末に最後は身分を明かして、ふたりはめでたく結ばれる。原作はボーマルシェ。同じ原作者によるモーツァルトの歌劇〈フィガロの結婚〉の前日譚に相当する。

いかにもドタバタ喜劇を思わせる快活さにあふれるが、実はこの序曲は旧

作からの転用である。多忙の人気作曲家ロッシーニはしばしば同じ曲を複数の作品に使いまわした。約3週間で書きあげられたという〈セビリアの理髪師〉だが、速筆のロッシーニも序曲までは用意できず、旧作〈イングランドの女王エリザベッタ〉の序曲が転用された。しかもこの〈イングランドの女王エリザベッタ〉序曲も、〈パルミーラのアウレリアーノ〉序曲からの流用である。よいと思えば何度でも使う作曲者の現実的な姿勢があらわれている。

開幕を短く告げる強奏に続いて、ひそひそとささやくように弦楽器が続く。短いフレーズをくりかえしながら次第に音量を増す得意の「ロッシーニ・クレッシェンド」が期待感を煽る。本編とは無関係とわかっていても、ついフィガロの活躍や伯爵とロジーナのロマンスを連想してしまう。達人の筆が生んだ汎用型序曲とでも呼ぶべきか。

と関係のあるタイトルが付いた八つの部分が続く。ここでは先に挙げた交響詩のように、ソナタ形式やロンド形式など明確な構造の枠組みを与えることはできないが、全体は大きく2部分に分けられ、前半（序奏から“埋葬の歌”まで）は提示部、後半は展開部と終結部（再現部は欠く）と、ソナタ形式の構造が意識された。さらに後半にはフーガとワルツが含まれる。

“序奏”は、スタンリー・キューブリック監督の映画『2001年宇宙の旅』（1968年制作）で用いられた、きわめて印象的な、宇宙の広がりをおぼせる音楽である。低音に支えられてトランペットが「ド・ソ・ド」の動機を3回繰り返すなかで音量は次第に増していき、オルガンを含む全楽器が力強く響きわたる。

“世界の背後を説く者について”は、低音の静かなトレモロにのせて管楽器とオルガンの低音がうごめき、チェロとコントラバスのピッツィカートで憧れの主題が現れる。速度をゆるめてたっぷりとした主題が細分化された弦楽器でニュアンス豊かに歌われる。“大いなる憧れについて”では、憧れの主題に由来するロマンティックな主題や冒頭の動機が新しい主題に受け継がれる。ハープの急速な下行で“歓喜と情

熱について”に入ると、新しい主題が情熱的に歌われ、音楽はうねる。ハープのグリッサンドも効果的で、最後にトロンボーンが流れに抵抗するかのようにより強い主題を示す。静かになると“埋葬の歌”で、オーボエが嘆きの歌を奏で、ここまでの主題が現れて、展開させながら沈み込んでいく。

“科学について”は、コントラバスとチェロから始まるフーガで暗く重たい。しばらくすると速度が速くなり、ヴァイオリンとフルートの明るい音色で幸福感が広がり、冒頭の動機が木管に現れ、複雑に絡み合う。“病から回復に向かう者”では、力強いフーガの主題がトロンボーンと低弦から始まる。大きく高まり、冒頭の動機がゆっくりと立ち上がる。全体止をはさみ静かになると、低音のうごめきやこれまでの主題が現れ、トランペットの信号を合図に華やかさが戻ってくる。“舞踏の歌”は、シュトラウスらしい華やかなワルツで、ヴァイオリン独奏がウィーンの舞踏会風の旋律を奏でる。ホルンの表情豊かな夜の歌とも絡みながら進み、長大なクライマックスを作り上げる。“さすらい人の夜の歌”で、その高まりは次第に崩れていき、鐘が打ち鳴らされる。音楽はゆるやかに落ち着き、最後は静かに消えいく。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ、打楽器（グロックンシュピール、トライアングル、シンバル、大太鼓、サスペンデッド・シンバル、鐘）、ハープ2、オルガン、弦五部

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、弦五部

ビゼー 〈アルルの女〉第2組曲

作曲：1872年（原曲）、1879年（第2組曲）／初演：1872年9月30日（原曲）、1880年3月21日（第2組曲）、以上パリ／演奏時間：約18分

1872年、パリのヴォードヴィル座の芸術監督カルヴァロは、作家ドーデの短篇集『風車小屋だより』の一篇「アルルの女」を戯曲として上演しようと考へ、ジョルジュ・ビゼー（1838～75）に音楽を依頼した。経済的事情からオーケストラのメンバーは26人のみに限られたが、ビゼーはむしろこの制約に創作意欲を刺激されたかのように迅速に曲を書きあげた。しかし、初演は不評で、短期間で上演が打ち切られてしまう。ビゼーは後に劇音楽から4曲を選び、フルオーケストラ用に編曲して第1組曲を仕立てた。さらに、ビゼーの死後となる1879年には、友人の作曲家エルネスト・ギローの選曲と編曲により第2組曲が作られた。

戯曲〈アルルの女〉は、南仏を舞台とした実話にもとづく悲劇。農家の息子フレデリはアルルで出会った女に夢中になる。結婚の許しを得て有頂天になるが、馬番がやって来て、アルルの女は自分の娼婦だと告げる。フレデリは絶望するが、幼なじみの娘ヴィヴェットから思いを告白され、ヴィヴェットとの結婚を決意する。ふたりは婚約

して愛を誓うものの、フレデリは馬番の姿を目にして激しく動揺する。馬番に抱かれるアルルの女の幻影に耐え切れず、フレデリは階上から身を投げて命を絶つ。どこか〈カルメン〉を連想させるような物語だが、アルルの女は劇中に現れず、言葉だけで語られる。

第1曲 パストラール 短い序奏に続いて大らかで牧歌的な主題があらわれる。ピッコロが活躍する軽快な中間部を経て、最初の主題が回帰する。

第2曲 間奏曲 フレデリの葛藤をあらわすかのような重々しい総奏で開始される。アルト・サクソフォンがのびやかに陰影豊かな旋律を奏でる。

第3曲 メヌエット フルートとハーブの清澄な二重奏は有名。〈アルルの女〉といえばこの曲！ といいたいところだが、実はギローがビゼーの歌劇〈美しいパースの娘〉から転用したもの。

第4曲 ファランドール 戯曲の終場では、フレデリが南仏の舞曲ファランドールを踊った後で、命を絶つ。民謡〈王の行進〉の主題とファランドールを交替させながら進み、最後は両者が重なって熱狂的なフィナーレを迎える。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、アルト・サクソフォン、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（シンバル、大太鼓、プロヴァンス太鼓）、ハーブ、弦五部

ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14

作曲：1830年／初演：1830年12月5日、パリ／演奏時間：約55分

1827年、イギリスの劇団による「ハムレット」を観劇したエクトール・ベルリオーズ（1803～69）は、シェイクスピア作品の崇高さに胸を打たれるとともに、舞台女優のハリエット・スミッソンに熱い思いを燃えあがらせた。「彼女の演劇の才能がもたらす深い感銘は、シェイクスピアが与える衝撃にも匹敵する」。女優に理想化されたヒロイン像を見たベルリオーズは熱心に彼女を追いかけ続けた。やがて充たされぬ思いが苦しみへと変わると、作曲家は苦悩を芸術へと昇華させるかのように自伝的作品〈幻想交響曲〉を書きあげた。副題は「ある芸術家の生涯のエピソード」。鋭敏な感受性と豊かな想像力にあふれた若き芸術家が、恋に絶望してアヘンで服毒自殺を図るものの死には至らず、奇怪な幻覚を見るといった筋立てを持つ。

同時期にベルリオーズを触発したのは、アブネック指揮パリ音楽院演奏協会によるベートーヴェンの交響曲演奏会である。「ベートーヴェンは、シェイクスピアが詩の新しい宇宙を見せたように、新たな音楽の世界を開いてく

れた」。ベルリオーズの関心は、オペラやカンタータなどの声楽曲から、器楽曲の分野に向けて広げられることになった。失恋体験とベートーヴェン体験の両者がこの〈幻想交響曲〉に結実したといえるだろう。

第1楽章 “夢と情熱” 序奏に続く主部で、恋人を表す主題がフルートとヴァイオリンで奏でられる。この主題は形を変えてくりかえし登場する。

第2楽章 “舞踏会” ハープが活躍する華やかなワルツ。芸術家は舞踏会に集う人々に恋人の姿を探す。

第3楽章 “野の情景” イングリッシュ・ホルンと舞台裏のオーボエが羊飼いの笛の二重奏を吹く。ティンパニが遠雷を表現する。

第4楽章 “断頭台への行進” 恋人を殺して死刑を宣告された芸術家は断頭台にのぼる。

第5楽章 “ワルプルギスの夜の夢” 禍々しい魔女の夜宴。醜い姿に変わり果てた恋人がやってくる。吊いの鐘が鳴り、「怒りの日」の主題があらわれる。乱痴気騒ぎがくりひろげられ、壮絶なクライマックスへと突き進む。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（エスクラリネット持替）、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓）、ハーブ2、バンダ（オーボエ、鐘）、弦五部